小ネット リーダー研修会　2/13

小ネットの担い手確保に関する実践

～次世代の担い手にバトンをつなごう～

「社会的孤立」や「無縁社会」など地域課題が複合多様化する中、小地域ネットワーク活動がますます重要視される一方で、地域福祉活動を支える担い手の高齢化や、新たな担い手の不足が喫緊の課題となっています。

今年度の小地域ネットワーク活動リーダー研修会は、「小ネットの担い手確保に関する実践」をテーマに開催。地域で取り組まれているさまざまな担い手確保に関する実践から、今後の活動のあり方を学ぶ機会となりました。

基調講演

【関西学院大学 人間福祉学部
牧里　毎治　名誉教授】

牧里名誉教授はまず、次世代の担い手とされる地域住民の現状について説明。地域活動への参加の機会がなかった学生や、地域へ目を向ける余裕のない働き盛りの中高年など、地域や福祉への関心が薄い人々がいる中で、新たな担い手となる人材候補を絞ることの必要性を話しました。

また、現在の担い手がこれまで積み重ねてきた活動を重視するあまり、閉塞的でマンネリ化した活動となっていることが少なくありません。新たな担い手を受け入れる体制や環境について、今一度考える必要があります。

活動のあり方については、ついつい考えがちな「ないもの探し」ではなく、地域の強みや特性を活用する「あるもの探し」に切り替えることを強調。さらに企業など、違った視点や機能を持つ団体と連携するために、相手の目的に合わせ社会貢献を切り口に協働を働きかける必要性を述べました。

パネルディスカッション

吹田市
「福祉施設との協働による実践」
吹田市五月が丘地区福祉委員会

栗木 祐子さん

藤井 慎二さん

五月が丘地区では、障がいへの理解を深め支援活動を行うことを目的に、平成24年に地域の作業所への見学会を実施。ところが、障がい種別の広さを知り、「はたして自分たちに何ができるのか」と不安を感じました。

また、作業所では、災害時に障がいのある利用者が要配慮者となることから地域との連携の必要性を感じていました。

そこで、まずは地域と作業所が声を掛け合える関係性を目指そうと、作業所の代表が地区福祉委員となり地域活動に参加することになりました。福祉マップ探検隊として地域活動に参加することで、普段気づかなかった地域の危険な箇所が発見されるなど、地域活動を理解するきっかけとなりました。また、作業所の利用者が地域と交流を持つ機会として「輪にネットIN五月が丘」を開催。地区福祉委員会が主催で、作業所の利用者が発表を行うもので、作業所の職員だけでなく、利用者と地域住民の顔の見える関係性が生まれています。

岸和田市
「若い世代が参加しやすい組織づくり」
岸和田市光明地区福祉委員会

北野 正清さん

津田 尚子さん

光明地区では、継続的に活動することを目的に平成24年度から組織改革を行いました。従前までの部会制の廃止や1年任期の団体役職ではなく複数年期のボランティアスタッフとして募集することで、自由に活動を選んで参加できる仕組みにしました。

また、災害時避難行動要支援者への支援体制づくりとして災害時に安否確認を行う支援者を隣近所で2人選定。年に1回の安否確認訓練では、約300人の参加があり、そこから災害時だけでなく、普段からの見守りにもつながっています。若い世代の支援者を将来のボランティアスタッフにつなげていきたいと強調しました。

若い世代がより参加しやすくするために、「相手の興味関心や立場に寄り添う」、「家庭・仕事が最優先」、「来れる時だけ来てください」など、緩やかなつながりで活動が負担とならないように工夫をしています。

阪南市
「子ども福祉委員の実践」
阪南市桃の木台校区福祉委員会

藤本恵津子さん

桃の木台校区では住民懇談会での「子どもにも担い手になってほしい」という声から子ども福祉委員の活動がスタート。校区福祉委員と社協の呼びかけに応じた中学生が自主的に集まり組織化されました。

民生委員と一緒に高齢者訪問インタビューを行い困りごとを集約し、それに応えたいという子どもたちの声から、『夢かなえ隊』として便利屋を立ちあげました。

中学生がチラシを作成し民生委員とともに配布。実際の依頼内容には、庭の草抜き、カーテンの付け替え、将棋の相手、買い物の付き添い、家庭菜園など幅広くあります。

子どもたちの主体性を大切に活動することで「学校内で友人関係が難しかった生徒が、すごく協調性がつきました」と校長から嬉しい変化も聞きました。

この活動は、現在3中学校、1小学校に広がっており、市内全域での活動を目指していきます。